

## 2

本シリーズ編集委員“味読・熟読”  
お薦め文献集

原田誠一

外来精神科診療シリーズ編集主幹

外来精神医療を行ううえで参考になる推奨文献の選択に関しては、当然のことながら多種多様なバリエーションが存在する。ここでは本シリーズの編集委員（以下、“本シリーズの編者ら”と記す）の独断に基づいて、基本文献をセレクトしてみた。紹介の順は①本シリーズで紹介した先達の著作，②本シリーズに寄稿して下さった先生の著作，③その他の先生の著作の順として、今回は「お一人，1著作」を原則とした。

なお、本シリーズには巻数の表記がないが、文中に出てくる（第〇巻収載）の部分の巻数は、本シリーズの以下のタイトルと対応している。

- 第1巻：メンタルクリニックが切拓く新しい臨床—外来精神科診療の多様な実践
- 第2巻：メンタルクリニックでの薬物療法・身体療法の進め方
- 第3巻：メンタルクリニック運営の実際—設立と経営，おもてなしの工夫
- 第4巻：診断の技と工夫
- 第5巻：精神療法の技と工夫
- 第6巻：発達障害，児童・思春期，てんかん，睡眠障害，認知症
- 第7巻：不安障害，ストレス関連障害，身体表現性障害，嗜癖症，パーソナリティ障害
- 第8巻：統合失調症，気分障害
- 第9巻：精神医療からみたわが国の特徴と問題点
- 第10巻：メンタルクリニックのこれからを考える（本書）

原田誠一（はらだ・せいいち）

略歴

1957年東京都生まれ。1983年東京大学医学部卒。東京大学医学部附属病院精神神経科、東京都立中部総合精神保健センター、東京都立墨東病院内科・救命救急センター、神経研究所附属晴和病院、東京通信病院精神科医長、三重大学医学部精神科神経科講師を経て、2002年より国立精神・神経センター武蔵病院外来部長。2006年7月より原田メンタルクリニック・東京認知行動療法研究所を開設。現在、原田メンタルクリニック院長。

主な著書として、『正体不明の声—対処するための10のエッセンス』（アルタ出版、2002）、『統合失調症の治療—理解・援助・予防の新たな視点』（2006）、『精神療法の工夫と楽しみ』（2008）、監修として、『強迫性障害治療ハンドブック』（2006）〈以上、金剛出版〉、『強迫性障害のすべてがわかる本』（講談社、2008）など多数。



## 1 本シリーズで紹介した先達の著作

### ◆浜田 晋『街かどの精神医療』(医学書院)

推薦書リストのトップバッターは、浜田 晋（敬称略、以下同）、外来精神医療～メンタルクリニックにとって浜田は優れたパイオニアの一人であり、彼の著作がもつ意義は現在も色褪せていない。

浜田の臨床活動と業績に関しては、竹中星郎「浜田 晋先生を偲ぶ―地域で暮らす患者とともに」（第1巻収録）に詳しい。また代表作の読解の手引きとして、徳永 進と小林一成が本巻に寄稿した「浜田 晋の姿勢―著作3冊から」（『病める心の臨床』、『一般外来における精神症状のみかた』〈医学書院〉、『町の精神科医』〈星和書店〉）がある。この2編によって、浜田への親しみと興味をもってもらいたいと思う。

### ◆藤澤敏雄『精神医療と社会』(批評社)

もう一人の先駆者・藤澤敏雄にまつわる評伝エッセイが、吉川武彦の「おーい、フジサワ、どうしている―時代を彩ったひとり、藤澤敏雄を偲ぶ」（第1巻収録）である。加えて彼の代表作を読み解く案内書として、浅野弘毅、森山公夫による「藤澤敏雄著『精神医療と社会』をめぐる往復書簡」が本巻に収録されている。この2編は、藤澤の魅力ある人となりや活動内容～時代背景を知る格好のガイド役を果たしてくれる。

### ◆生村吾郎『開業日記―私が這っている精神医療の道』(批評社)

関西のパイオニアの一人・生村吾郎の紹介文に、岩尾俊一郎による「生村吾郎の思い出」（第8巻収録）がある。加えて、本巻に岩尾俊一郎と高木俊介が生村の代表作3編、

- 回復をはばむもの―精神医療の侵襲性について―（『臨床精神病理』1992；13：9-16）
- 「近代天皇制」が精神医療構造に与えた影響―「府県統計書」並びに「行幸啓誌」の分析を通じて（『病院・地域精神医学』1995；36：155-162）
- 『開業日記―私が這っている精神医療の道』(批評社)

を解説した往復書簡を寄せている。独創的な生村の思想～実践を具体的に伝えてくれる名編だ。

### ◆桂アグリ「地域におけるリハビリテーション―精神科診療所の立場から」(臺 弘編『分裂病の生活臨床』創造出版)

桂アグリは、地域診療所においてデイケア（ひるま病室）や訪問活動（アウトリーチ）を実践した先駆者の一人である。時代を先駆けた活動の様子が、「地域におけるリハビリテーション―精神科診療所の立場から」に活写されている。桂の令嬢であり、自身も精神科クリニックを開業している海老澤佐知江が、紹介文「精神科デイケア『ひるま病室』のことなど」（第8巻収録）を寄せており、桂論文を紐解く何よりの手引きとなっている。

ここまで紹介してきた浜田 晋、藤澤敏雄、生村吾郎、桂アグリ活動を含めた「診療所運動」の概要とその後の展開を、高木俊介が「統合失調症をもつ人々の地域生活

支援と外来クリニックーわが国におけるその歴史と展開」(第8巻収載)でわかりやすく解説している。これら先駆者との交流があり諸事情に精通していて、自らACT-Kを実践する高木ならではの優れた内容である。

ちなみに本シリーズの編者らは「刊行にあたって」のなかで自らを“五人の侍”になぞらえたが、この浜田・藤澤・生村・桂の“一姫三太郎”は、「“五人の侍”の大先達～師匠格である“四人の侍大将”」といった位置づけになるだろうか。読者諸賢におかれましては、“四人の侍大将”と親しく接する機会をもち、改めて精神医療を考える温故知新の機会をおもちくださりますことを。

#### ◆下坂幸三『心理療法の常識』(金剛出版)

精神科診療を行っていくうえで、家族への適切なアプローチが要請される局面が頻繁にある。そうした際に頼りになる臨床の知を著した先達の一人が、開業家族療法家のパイオニアの一人・下坂幸三だ。

下坂の個人史～実践の概要については、下坂の高弟・中村伸一による「下坂幸三先生を偲ぶ」がある(第1巻収載)。家族療法の専門家ではない本シリーズの編者らが家族とかかわる際の定石の一つにしているのが、下坂の『心理療法の常識』に記載されている「常識的家族療法」であり、必読文献の一つといってよいだろう。

#### ◆鈴木知準『森田療法を語る』(誠信書房)

開業診療所で森田療法を実践した先駆者の一人に、鈴木知準がいる。岩木久満子は「鈴木知準先生を偲ぶ」(第1巻収載)のなかで、鈴木の足跡と実践内容を紹介するとともに、著書『森田療法を語る』にまつわる個人的な思い出を記している。

ちなみに、本シリーズに収載された森田療法と関連の深い論に以下のものがある。

- 内村英幸「クリニックにおける森田療法の実践と展望」(第1巻収載)
- 北西憲二「外来森田療法専門クリニックの治療システムについて—現代的病態への対応」(第1巻収載)
- 竹田康彦「認知・行動療法と森田療法の統合の試み—思春期・青年期臨床の立場から」(第1巻収載)
- 岩木久満子「精神療法の各流派からみた診断のコツとポイント／森田療法」(第4巻収載)
- 岩木久満子「精神療法の各流派からみたコツとポイント／森田療法」(第5巻収載)
- 内村英幸「心身症と心身医学の現在」(第7巻収載)

## 2 本シリーズに寄稿して下さった先生による著作 (五十音順)

#### ◆飯倉康郎, 芝田寿美男, 中尾智博, 中川彰子『強迫性障害治療のための身につける行動療法』(岩崎学術出版社)

日頃、外来診療に従事していて痛感していることの一つに、「不安障害に対する薬

物療法以外のアプローチが十分実践されておらず、治療が難航している症例が「すこぶる多い」という問題がある。たとえば、薬物療法抵抗性の強迫性障害、パニック障害、社交不安障害、恐怖症、心気症への精神療法的対応が十分実践されていないのが、残念ながら現状の大勢ではあるまいか。そして当然のことながらこうした傾向は、当事者・家族にとって深刻な問題をはらんでおり、治療者自身にとっても幸せなことではなからう。

このような臨床のニーズに対して、有効性のエビデンスをもつ診療ツールの一つが認知行動療法である。本シリーズの編者らは認知行動療法を万能視しているわけではないが、精神科医が認知行動療法に関する知識・経験をもっていると臨床的対応力が増すので、最低限の知識・経験をもつことが望ましいと考えている。九州大学精神科行動療法研究室出身の俊英らが著した本書は、こうした精神医療～精神科医のニーズに答えてくれる最良の入門書の一つである。

著者らは、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 飯倉康郎「強迫性障害に対する治療の工夫」(第7巻収載)
- 中尾智博「ためこみ症の病理と治療」(第7巻収載)
- 中川彰子「心に引っかかっていた強迫性障害の症例」(第7巻収載)

また九大行動療法研究室の指導者である山上敏子の高弟の一人・原井宏明は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 原井宏明「強迫性障害の認知行動療法—個人療法、集団集中療法、サポートグループ」(第1巻収載)
- 原井宏明「精神療法の各流派からみた診断のコツとポイント／行動療法」(第4巻収載)
- 原井宏明「精神療法の各流派からみたコツとポイント／行動療法」(第5巻収載)
- 原井宏明「処方薬嗜癖について」(第7巻収載)

#### ◆井上和臣『認知療法への招待』改訂4版(金芳堂)

前項で薬物療法抵抗性の不安障害の診療の問題点を記したが、同じことが薬物療法抵抗性の気分障害においてもいえるように感じられる。そして、これをカバーするための最良の認知療法の入門書の一つが本書である。

井上は、本シリーズに以下の寄稿を行っている。

- 井上和臣, 内海浩彦「認知療法の実践—外来個人療法から復職デイケアまで」(第1巻収載)
- 井上和臣「精神療法の各流派からみた診断のコツとポイント／認知行動療法」(第4巻収載)
- 井上和臣「精神療法の各流派からみたコツとポイント／認知行動療法」(第5巻収載)
- 内海浩彦, 桐山知彦, 竹本千彰, 井上和臣「リワーク活動における診断」(第4巻収載)
- 井上和臣, 竹本千彰, 桐山知彦, 内海浩彦「リワークからみた精神療法」(第5巻収載)

日本認知療法学会理事長の大野 裕が、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 中川敦夫, 大野 裕「うつ病スペクトラムと DSM-5 診断カテゴリー」(第 8 巻収載)

#### ◆井原 裕『激励禁忌神話の終焉』(日本評論社)

井原 裕が『激励禁忌神話の終焉』で述べた論旨と陳述スタイルは、本シリーズの編者らにとって新鮮なものであった。井原の論点は従来の精神医学～精神医療の盲点を鋭く突いており、精神科医が読むべき内容の一つと考えている。

井原は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 井原 裕「抗うつ薬の効果を最大化する—3 夕雨乞い療法の超克」(第 2 巻収載)
- 井原 裕「こころの健康, 3 つの習慣—療養指導の実際」(第 9 巻収載)

#### ◆内山 真, 睡眠障害の診断・治療ガイドライン研究会『睡眠障害の対応と治療ガイドライン』(じほう)

前項の井原が重視する「睡眠に関する生活習慣指導」を行う際の標準的な基準に、内山らが示した「睡眠障害 12 の指針」がある。この内容が現時点におけるゴールド・スタンダードであり、精神科医すべてが十分理解し適宜診療の場で活用できるようにしておくべきであろう。

内山は、本シリーズに以下の寄稿を行っている。

- 内山 真「アルコール, カフェイン, 医薬品摂取に伴う睡眠障害」(第 6 巻収載)  
また睡眠にまつわる外来診療に関して、本シリーズに次の寄稿がある。
- 中村真樹, 井上雄一「睡眠クリニックのニーズと使命—現状と問題点, これからの未来像」(第 1 巻収載)
- 中村真樹, 井上雄一「精神科診断に役立つ質問票, 症状評価尺度—概要と利用法／睡眠障害」(第 4 巻収載)
- 中村真樹, 井上雄一「疾患ごとの精神療法のコツ／睡眠障害」(第 5 巻収載)
- 「睡眠障害」に関する論文とエッセイ 10 編 (第 6 巻収載)

#### ◆臺 弘『誰が風を見たか—ある精神科医の生涯』(星和書店)

臺 弘は傑出した生物学的精神医学研究のリーダーの一人であり、同時に臨床精神医療にも造詣が深くさまざまな貢献を行った。その業績の一端が、編書『分裂病の生活臨床』、『続・分裂病の生活臨床』(創造出版)として残されている。生物学的精神医学～臨床研究の双方に通暁した臺の自叙伝『誰が風を見たか—ある精神科医の生涯』は、現代の精神科医が味読するに値する味わい深い内容だ。

臺が晩年に取り組んだ臨床テーマの一つが、統合失調症の簡易精神機能テストであった。独創性と実用性に富んだこの課題について、本シリーズへの次の寄稿文で親しく語っている。

- 臺 弘「統合失調症の簡易精神機能テスト」(第 1 巻収載)

臺と江熊要一, 湯浅修一, 中沢正夫, 菱山珠夫, 宮内 勝らが推進した生活臨床のその後の展開に関する本シリーズの論述に、次の寄稿がある。

- 伊勢田 堯, 小川一夫, 長谷川憲一「精神療法の各流派からみた診断のコツとポイント／生活臨床」(第 4 巻収載)

- 伊勢田 堯, 小川一夫, 長谷川憲一「精神療法の各流派からみたコツとポイント／生活臨床」(第5巻収載)

◆小俣和一郎『精神医学の歴史』(第三文明)

小俣和一郎は開業精神科医の先達であり、精神医学史の優れた碩学の一人である。小俣の『精神医学の歴史』を紐解いて精神医学史を振り返り、精神医療の現状～これからの考える時間は貴重なものになるに違いない。

小俣は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 小俣和一郎「歴史と精神医学、精神療法と自由診療」(第1巻収載)
- 小俣和一郎「メンタルクリニックの歴史：総論」(第10巻収載)
- 小俣和一郎「精神医学の行方」(第10巻収載)

◆笠原 嘉『外来精神医学という方法』(みすず書房)

笠原 嘉は、外来精神医療を語るうえで欠かせない大御所的存在の一人である。外来分裂病やスチューデント・アパシーという術語を作成して、統合失調症～うつ病の時代的変遷・軽症化～多様化を論じた嚆矢が笠原であった。加えて笠原による各種の精神病理学論や小精神療法は、多くの精神科医の臨床実践の基盤になってきた。

笠原は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 笠原 嘉「今日の精神科クリニックで診る『外来統合失調症、躁うつ病、うつ病とその周辺』」(第1巻収載)

ちなみに、笠原の盟友の一人である木村 敏の代表作の一つへのたいへん鋭い批評文が、本巻収載の次の論文である。

- 安富 歩「『異常』とは何か―児童虐待と性的傾向抑圧の観点から」(第10巻収載)

◆神田橋條治『改訂・精神科養生のコツ』(岩崎学術出版社)

神田橋條治は精神分析に軸足をおきつつも、その枠にとらわれない自由闊達・融通無碍な診療を実践して、そこから得られた独自の臨床の知を発信してきた。秀作揃いの神田橋の著作のなかでも、『改訂・精神科養生のコツ』は当事者・家族の参考にしてもらえる実用性の高い内容であり、外来診療を行う際に欠かせない一冊だ。本シリーズの編者らは、多くの当事者・家族に本書の購読をすすめてきた。

神田橋は、本シリーズに以下の寄稿を行っている。

- 神田橋條治「夢と消えたクリニック開業とその残渣」(第8巻収載)
- 神田橋條治「原田論文へのコメント」(第9巻収載)

また本シリーズの次の論で、フラッシュバック体験に対する神田橋の漢方処方が紹介されている。

- 波多腰正隆「外傷体験・フラッシュバックの薬物療法 (向精神薬, 漢方薬)」(第7巻収載)

本シリーズに関して神田橋が『精神医学』誌に寄せた書評を、次のサイトで閲覧できる。

<https://nakayamashoten.jp/wordpress/bookreview/2017/11/28/74007/>

◆小石川真実『大いなる誤解・親子が殺し合わないために一子供の魂を健やかに育て、幸せな親子関係を築くために必要なこと』(金剛出版, 近刊)

小石川真実は現役の内科医であり、かつて境界性パーソナリティ障害の診断のもと精神医療を受けた経歴をもつ。その著書『大いなる誤解・親子が殺し合わないために』は、機能不全家族のなかで育つ子どもの苦悩が詳細に述べられ、そこから生まれる病態に「親子関係関連障害」という名称が提案されている。さらには、こうした親子関係を減らすための提言がなされ、「親子関係関連障害」の当事者・家族のサポートを現在の標準的な精神医療が十分なしえていない実情が記されている。当事者・家族の歴史と心情、そして現行の精神医療への提言と接することのできる貴重な文献である。

小石川は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- ・小石川真実「『患者をよくする』ことを念頭においた診断を」(第4巻収載)
- ・小石川真実「本気でわかろうとしてくれる人が一人でもいると患者は立ち直れる」(第5巻収載)

◆小阪憲司, 池田 学『レビー小体型認知症の臨床』(医学書院)

高齢者の認知症で2番目に多いレビー小体型認知症を発見・報告した小阪憲司が、池田 学を相手に発見のプロセス～臨床の全容を語りつくした著作である。本書を紐解くことでレビー小体型認知症に関する知識を深めることができるばかりでなく、真の臨床医学の方法論について学ぶことができる。

小阪は、本シリーズに以下の寄稿を行っている。

- ・小阪憲司「クリニックにおける認知症の臨床の実際―特に『レビー小体型認知症』の診断と治療」(第1巻収載)
- ・小阪憲司「心に残る認知症症例」(第6巻収載)

前者では、認知症診療における小阪の実践のありようと、「レビー型認知症の診断と治療のポイント」が具体的に述べられている。後者の「心に残る認知症症例」では、小阪が発見・報告した3つの認知症「レビー小体型認知症 DLB」, 「石灰沈着を伴うびまん性神経線維変化病 DNTC」, 「辺縁系神経原線維変化型認知症 LNTD」, の“こころに残る症例”が、詳しく供覧されている。

なお高齢者の精神医療と関連のある本シリーズの論に、次の寄稿がある。

- ・三原伊保子「認知症高齢者を在宅で支える―精神科診療所のチャレンジ」(第1巻収載)
- ・芦刈伊世子「成年後見制度」(第3巻収載)
- ・植木昭紀, 宇和典子「精神科診断に役立つ質問票, 症状評価尺度―概要と利用法／認知症」(第4巻収載)
- ・植木昭紀, 宇和典子「疾患ごとの精神療法のコツ／認知症」(第5巻収載)
- ・「認知症」に関する論文とエッセイ9編 (第6巻収載)
- ・「超高齢社会～ターミナルケア」に関する論文とエッセイ4編 (第9巻収載)

◆斎藤 環『オープンダイアログとは何か』(医学書院)

ラカン派の論客である斎藤 環は、近年フィンランド発の斬新な方法論「オープン

ダイアログ」に傾倒して、その紹介・導入に力を注いでいる。斎藤の『オープンダイアログとは何か』は、オープンダイアログに関する日本語の成書の嚆矢となった記念碑的著作である。オープンダイアログは（結果的に）現在の精神医学～精神医療への根源的な問いかけを行っている新しい方法論であり、現代のすべての精神科医が学ぶべき内容といってよいのではないか。

斎藤は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 斎藤 環「双極性障害の薬物療法・雑感」(第2巻収載)
- 斎藤 環「“コミュ障”を生み出す社会」(第9巻収載)

◆高木俊介『ACT-Kの挑戦—ACTがひらく精神医療・福祉の未来』(批評社)

精神医療へのさまざまな貢献を行い「統合失調症」という病名の名づけ親となった高木俊介は、わが国にACT (Assertive Community Treatment: 包括型地域生活支援プログラム) を導入したパイオニアでもある。その高木が自らの実践と考察を記した本書は、ACTについて学ぶ最良のテキストだ。

高木は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 高木俊介「ACT-K」(第1巻収載)
- 高木俊介「薬物療法と製薬企業—私たちは健全な二重見当識をもとう」(第2巻収載)
- 高木俊介「チームワークのためのリーダーシップ, 雑感」(第3巻収載)
- 高木俊介「神田橋條治『精神科診断面接のコツ』を再読する」(第4巻収載)
- 高木俊介「神田橋條治『精神療法面接のコツ』を再読する—オープンダイアログへの道」(第5巻収載)
- 高木俊介「統合失調症をもつ人々の地域生活支援と外来クリニック—わが国におけるその歴史と展開」, 「アカシジア, 遅発性アカシジア」(第8巻収載)
- 高木俊介, 村上文江「福八子どもキャンププロジェクトの活動を振り返って」(第9巻収載)

またACTに関して、本シリーズに次の寄稿もある。

- 藤田大輔「Assertive Community Treatment (ACT)」(第8巻収載)

◆高橋正雄『漱石文学が物語るもの—神経衰弱者への畏敬と癒し』(みすず書房)

新しい病跡学の旗手である高橋正雄は、幅広い対象に関する優れた論考を精力的に発信し続けている。高橋がライフワークとしている対象の一人が夏目漱石であり、その精華が『漱石文学が物語るもの』である。病跡学の新しい展開を知るためにも、手に取りたい一冊だ。

高橋は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 高橋正雄「病跡学からみた精神医学的診察と診断」(第4巻収載)
- 高橋正雄「病跡学と精神療法—精神療法家としてのドストエフスキー」(第5巻収載)

◆田島 治『抗うつ薬の真実』(星和書店)

現在の精神科薬物療法の問題点を、田島 治は「「足す」治療～「引く」治療」という視点を導入して斬新～明快に論じた。ともすれば「足す」薬物療法が行われさまざまな弊害が生じている現在、田島の著作は傾聴すべき警鐘を鳴らしている貴重な存在

だ。

田島は、本シリーズに以下の寄稿を行っている。

- 田島 治「『引く』薬物療法」(第2巻収載)

◆長嶺敬彦『生命をつなぐドパミンの物語—抗精神病薬の薬理から』(内外医学社)

優れた麻酔科医～内科医である長嶺敬彦が、精神医療とかかわることになった僥倖をありがたく感じ入っている精神科医は少なくないだろう。その長嶺が、精神薬理学を内科学の知識で読み解き精神科臨床に応用する PIM (psychiatric internal medicine) の方法論を用いて、「わたしたちの生命をつなぐ役割を果たしているドパミン神経系」を詳しく語ったのが本書である。

長嶺は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 長嶺敬彦「受容体プロフィールと副作用の関係」(第2巻収載)

◆中村伸一『家族・夫婦臨床の実践』(金剛出版)

家族療法のリーダーの一人・中村伸一が、その臨床の知を語り尽くした著作である。一般の精神科医にも、家族・夫婦臨床の要諦が伝わるよう工夫がなされている。

中村は、本シリーズに以下の寄稿を行っている。

- 中村伸一「家族療法」(第1巻収載)
- 中村伸一「下坂幸三先生を偲ぶ」(第1巻収載)

なお、本シリーズに収載された家族療法関連の論に以下のものがある。

- 榎林理一郎「精神療法の各流派からみた診断のコツとポイント／家族療法」(第4巻収載)
- 榎林理一郎「精神療法の各流派からみたコツとポイント／家族療法」(第5巻収載)
- 榎林理一郎「双極性障害と家族療法的支援の実際」(第8巻収載)
- 渡辺俊之「現在の家族の特徴」(第9巻収載)

◆成田善弘『精神療法の深さ—成田善弘セレクション』(金剛出版)

精神分析の権威の一人、成田善弘の論文選集である。“転移／逆転移”、“解釈の実際”、“強迫性障害～境界例～心身症～リエゾン精神医療”など、成田の臨床研究の真髓を学ぶことができるアンソロジーであり、すべての精神科医が紐解くべき優れた内容になっている。

成田は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 成田善弘「精神分析をふまえた診療の実際」(第1巻収載)

なお本シリーズに収載された精神分析関連の論に、以下のものがある。

- 鷺谷公子「精神科クリニックにおける精神分析的な診療の実際」(第1巻収載)
- 鈴木 龍「精神科外来診療における精神療法的アプローチ」(第1巻収載)
- 奥寺 崇「精神療法の各流派からみた診断のコツとポイント／精神分析」(第4巻収載)
- 奥寺 崇「精神療法の各流派からみたコツとポイント／精神分析」(第5巻収載)
- 和田秀樹「精神療法の各流派からみた診断のコツとポイント／自己心理学 (コフート心理学)」(第4巻収載)
- 和田秀樹「精神療法の各流派からみたコツとポイント／自己心理学 (コフート心理

学)』(第5巻掲載)

- 生地 新「表層化していく社会における精神医療・精神療法の未来—交流しないことのメリットとリスク」(第9巻掲載)

◆**信田さよ子『それでも家族は続く—カウンセリングの現場で考える』(NTT出版)**

精神科診療を行っていくうえで欠かせない概念のなかに、「アダルト・チルドレン、共依存、機能不全家族」がある。これらの特徴と回復過程についてわかりやすく解説している代表的な論者に、斎藤 学と信田さよ子がいる。斎藤の古典的名著『アダルト・チルドレンと家族—心の中の子どもを癒す』(学陽書房)に続く信田の『それでも家族は続く』では、「ミソジニー(女性蔑視)、ロマンチックラブイデオロギー(RLI)“愛・性・結婚の三位一体説”」などが詳しく説かれている。

信田は、本シリーズに以下の寄稿を行っている。

- 信田さよ子「DV被害者・加害者・子どもへのアプローチ」(第9巻掲載)

◆**帚木蓬生『ギャンブル依存国家・日本—パチンコからはじまる精神疾患』(光文社)**

帚木蓬生(森山成彬)は、わが国におけるギャンブル障害臨床のパイオニアの一人である。帚木(森山)は『ギャンブル依存国家・日本』のなかで、わが国におけるギャンブル障害の実態と社会的背景を精述した。そのなかでわが国を“ギャンブル汚染列島”と化した「5つの不作為の大罪」をあげ、「政府と行政、警察、メディア、精神医学界、法律家」の問題点を鋭く厳しく糾弾した。カジノが導入されようとしている現在、精神科医が熟読すべき一冊である。

森山(帚木)は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 森山成彬「ギャンブル障害の臨床」(第1巻掲載)
  - 森山成彬「無告知投薬の実態とその是非」(第2巻掲載)
  - 森山成彬「スタッフに給料を出せる喜び」,「執筆、講演、自助グループ参加」,「病を得た治療者」(第3巻掲載)
  - 森山成彬, 原田誠一「精神科診断をめぐる往復書簡」(第4巻掲載)
  - 森山成彬, 原田誠一「精神療法をめぐる往復書簡」(第5巻掲載)
  - 森山成彬「ニーバーの祈り」,「ギャンブル障害は『自己責任』ではなく『国家責任』」,「一心さんの改心」,「インターセックスからの手紙」(第7巻掲載)
- なお依存症～嗜癖と関連のある本シリーズの論に、次の寄稿がある。
- 西山 仁「不穏なアルコール依存、薬物依存患者への対応の実際—対策と予防」(第3巻掲載)
  - 大石雅之「精神科診断に役立つ質問票、症状評価尺度—概要と利用法／依存症、嗜癖」(第4巻掲載)
  - 大石雅之「疾患ごとの精神療法のコツ／依存症、嗜癖」(第5巻掲載)
  - 「嗜癖症と依存症」に関する論文とエッセイ14編(第7巻掲載)
  - 「依存と嗜癖—現状とこれからの課題」に関する論文とエッセイ7編(第9巻掲載)

◆**星野 弘『分裂病を耕す』(星和書店)**

統合失調症の精神療法を考える際に、Schwing的姿勢を基本におく見解の妥当性

が広く認められている。こうした Schwing 的姿勢と軌を一にする臨床を実践し、その経験を記したわが国の精神科医の一人に星野 弘がいる。『分裂病を耕す』のなかで、星野が記している「はじめに、私という医者処方する」という気構えは、すべての精神科医にとっての規範であり目標となるものだ。

星野は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- ・星野 弘「クリニックの開業」(第1巻収載)

#### ◆細川 清『てんかんと精神医学』(星和書店)

近年、精神科医がてんかんの診療にあたる機会が減っているが、こうした傾向が患者・家族・精神科医自身の三者にとって好ましからざる結果を生む可能性が指摘されている。このようななか、細川 清による著作『てんかんと精神医学』を精神科医が紐解く意義は大きい。

細川は、本シリーズに以下の寄稿を行っている。

- ・細川 清「心に残る症例」(第6巻収載)

現代の精神医療とてんかんの関連について論じたものに、本シリーズの次の寄稿文がある。

- ・伊藤ますみ「精神科クリニックで実践するてんかん診療」(第1巻収載)
- ・「てんかん」に関する論文とエッセイ9編 (第6巻収載)

#### ◆八木剛平『医学思想史—精神科の視点から』(金原出版)

八木剛平が1993年に刊行した『精神分裂病の薬物治療学—ネオヒポクラティズムの提唱』(金原出版)は、臨床精神薬理学の流れを変える大きなインパクトを与えた。その後、八木はネオヒポクラティズム～レジリエンスをキーワードとして、斬新で豊富な論陣を張ってきた。その八木が医学思想史を「アニミズム、原始医学」から説き起こし、「20世紀後半の医学思想」、「現代医療の諸側面」を縦横に語った集大成的な著作がこの『医学思想史』である。

八木は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- ・八木剛平「ネオヒポクラティズムとレジリエンス—回復論的な治療思想と疾病抵抗モデル」(第1巻収載)
- ・多田光宏、内田裕之、八木剛平「ネオヒポクラティズムとレジリエンス—回復論的な治療思想と実臨床」(第2巻収載)

#### ◆山中康裕、細川佳博『MSSM への招待—描画法による臨床実践』(創元社)

表現療法の泰斗・山中康裕は、たいへん広い領域において優れた臨床活動を実践し、その独創的な成果を著作を通して発表してきた。本書『MSSM への招待』は、山中が開発したMSSM(相互ぐるぐる描き投影・物語統合法)を活用して進められた治療の経緯が、豊富な症例を通して示されている。細川佳博との共編著である本書は、MSSM～表現療法の真骨頂を体現する内容である。

山中は、本シリーズに以下の寄稿を行っている。

- ・山中康裕、原田誠一「精神科診断をめぐる往復書簡」(第4巻収載)
- ・山中康裕、原田誠一「精神療法をめぐる往復書簡」(第5巻収載)

- 山中康裕「老いのソウロロジー（魂学）と認知症の臨床」(第6巻収載)
  - 山中康裕「“カウンセラー”からみた現代の子ども」(第9巻収載)
- 山中が指導し牽引してきた領域のなかに、芸術療法とユング心理学がある。本シリーズに、芸術療法・ユング心理学と関連のある次の寄稿文がある。
- 石岡弘子「日常診療で出会うところと身体の境界領域の『人生』の治療—ユング心理学の立場から」(第1巻収載)
  - 武野俊弥「精神療法の各流派からみた診断のコツとポイント／ユング心理学」(第4巻収載)
  - 武野俊弥「精神療法の各流派からみたコツとポイント／ユング心理学」(第5巻収載)
  - 富澤 治「精神療法の各流派からみた診断のコツとポイント／芸術療法」(第4巻収載)
  - 富澤 治「精神療法の各流派からみたコツとポイント／芸術療法」(第5巻収載)
  - 岩宮恵子「現代思春期事情—思春期の『異能感』と『異質感』という視点から」(第9巻収載)

#### ◆和辻秀浩『精神医療を歩く—私の往診記』(日本評論社)

近年、精神医療のアウトリーチに注目が集まっているが、はるか以前より独自の往診活動を実践してきた一人が和辻秀浩である。「精神医療の根本、基本、それもその時代に措定された『精神医学・精神医療』のあり方と問題点を『往診』という形で問いつけている」和辻の代表作の一つが、本書『精神医療を歩く—私の往診記』だ。

和辻は、本シリーズに次の寄稿を行っている。

- 和辻秀浩「往診と地域精神医療」(第1巻収載)
- 和辻秀浩「往診と訪問」(第3巻収載)

## 3 その他の先生の著作

#### ◆齊藤万比古、小平雅基編集『臨床医のための小児精神医療入門』(医学書院)

すべての精神科医に小児精神医療～発達障害の学習が求められていることは、改めて指摘するまでもない常識的内容だ。本書は、こうした精神科医のニーズに応える良書の一つである。

小児～思春期の精神医療、発達障害と関連のある本シリーズの論に、次の寄稿がある。

- 小倉 清「子どもの精神科—私のクリニック」(第1巻収載)
- 川畑友二「私の子どもの精神科臨床」(第1巻収載)
- 田中康雄「発達障害の臨床」(第1巻収載)
- 服部陵子「児童、特に発達障害の受診が多いクリニックの場合—多大な診療ニーズが存在する現状と対応の工夫」(第3巻収載)
- 田中康雄「クリニック医が行う児童相談所との連携」(第3巻収載)
- 北野陽子、細尾ちあき「精神疾患をかかえた方の『子ども』に目を向けて下さい」(第4巻収載)

- 川崎葉子「精神科診断に役立つ質問票，症状評価尺度—概要と利用法／発達障害」(第4巻収載)
- 川崎葉子「疾患ごとの精神療法のコツ—発達障害」(第5巻収載)
- 「発達障害，児童思春期」に関する論文とエッセイ18編(第6巻収載)
- 「児童～思春期～青年期の現在」に関する論文とエッセイ8編(第9巻収載)
- 信田さよ子「DV被害者・加害者・子どもへのアプローチ」(第9巻収載)
- 森田展彰「児童虐待における援助—加害者と被害者への支援」(第9巻収載)
- 高橋利一「格差社会～貧困の子どもへの影響」(第9巻収載)
- 寺嶋恵美「母子生活支援施設における自立支援」(第9巻収載)
- 高橋利之「児童養護施設からの自立の支援」(第9巻収載)
- 小倉 清「クリニックおぐらの要覧」(第10巻収載)

◆ 土居健郎『方法としての面接—臨床家のために』(医学書院)

精神分析の指導者の一人であり，甘え理論の創始者でもある土居が一般臨床家向けに書き下ろした古典的名著である。特に「わからないという感覚の大切さ」，「ストーリーを読む」という内容は，精神科臨床に携わる者に膾炙されてきた。

◆ 中井久夫『中井久夫集全11巻』(みすず書房)

中井久夫に関しては，このリスト唯一の例外として「著作集11巻」のすべて，つまり全11冊をあげる。本シリーズ編者らのこの判断に，おそらく多くの読者諸賢もご賛同下さるのではないかと期待している。

ちなみに，近年「中井久夫と考える患者シリーズ」が刊行され話題になっている。この「中井久夫と考える患者シリーズ」を刊行しているラゲーナ出版を設立した森越まやが，次の寄稿を行っている。

- 森越まや「診断の『軽さ』と『重さ』—就労支援の現場から」(第4巻収載)
- 森越まや「“心の生ぶ毛”と“生活のひげ根”—就労支援の“語り”の現場から」(第5巻収載)

◆ 山上敏子『方法としての行動療法』(金剛出版)

わが国の行動療法のパイオニア的精神科医・山上敏子が，行動療法の全容を存分に語った著作である。「行動療法理解の基本」，「技法を知る」，「行動療法のすすめ方」，「方法としての行動療法」から成る本書は，すべての精神科医が通読・理解して臨床力をブラッシュアップすべき内容である。